



『橄欖』成立の歴史とそこに見る生徒の「自主」

宮城学院女子大学 一般教育部教授 小羽田 誠治

はじめに

歴史とは往々にして、勝者の歴史であり権力者の歴史であるが、社会史を専門とする私としては、その舞台裏を支えた者たち、あるいは陰に隠れた真の主体に関心が向く。学校が教育機関であるからには、その真の主体は学生・生徒であると言えるだろう。しかし、彼ら彼女らの声は通常小さく、また未熟であるがゆえに、ないがしろにされ、あるいは復元が困難であったりする。

本稿では『橄欖』がメインテーマであるが、私にとっての課題は、生徒たちがそこにどのように、またどれほど関わっていたのか、ということ进行を明らかにすることである。明治以来、近代日本において「民主」の確立が大きな課題の1つであったことは疑いないが、それに通ずる課題を、生徒たちの「自主活動」に見出すことができるのではないかと考えるからである。そして、これはまた「学生の主体性」が叫ばれる現在にまで通ずる課題でもある。

もともと、こうした大きな課題を考える前に、『橄欖』成立までの事実関係のレベルにおいても、今一度整理しておく必要性を認識した。このような考証作業が、体制がまだ整わず、また現存する資料も決して多くはない、明治後期から昭和初期にかけての宮城女学校の、当時の様相を復元することの一助になれば、幸いである。

1. 文学会の創設から『橄欖』誕生まで

1921（大正10）年6月30日、宮城女学校において雑誌『橄欖』が創刊された。発行したのは宮城女学校文学会（以下、文学会と略記）。巻頭には当時の英語教師土井晩翠による「『橄欖』に題して」という詩が掲載されたことは、『橄欖』を知る者にとっては、広く知られた事実である。創刊に際しては、その喜びが編集後記にて率直に表明されている¹。

橄欖が生れた。私共の橄欖は生れました。喜んで下さい。私共は今たゞ涙ぐんで、美しい、力強い、尊い産聲をきいてみます。土井先生の祝福の歌に、私共の橄欖の将来は、どんなに輝かしくなつたでせう。どんなに力あるものになつたでせう。

新たな雑誌が創刊されたのであるから、喜ばしいのは当然であるが、しかしこの喜びようはいかがであろうか。これを正しく理解するためには、『橄欖』が誕生するまでの宮城

¹ 『橄欖』1, 66頁。

女学校における文芸活動の歴史を理解しておく必要があるだろう。文学会とはいかなる組織なのか。宮城女学校においてはどのような雑誌が発行されていたのか。差し当たり、これらの疑問から解決していきたい。

a. 文学会の創設とその活動

文学会の創設については、1890(明治23)年とするのが通説のようである。というのは、『宮城学院七十年史』(以下、『70年史』と略記)²、『宮城学院八十年小誌』(以下、『80年史』と略記)³、『天にみ栄え』⁴のすべてにおいてそう記されているからである。特に『天にみ栄え』においては、1911(明治44)年10月に創立25周年記念式典が実施されたときに記念品として刊行された『私立宮城女学校一覽』(以下、『一覽』と略記)を一部抜粋する形で掲載している。また、『宮城女学校五十年史』(以下、『50年史』と略記)に寄稿された田村たみこの「文學會の創立に就いて」と題する報告においても、以下のように述べられている⁵。

今回原田さんよりの御手紙で学校の創立五十年祭を催すから文學會の起原に就て書いて送るやうとの事ですが、何しろ四十五六年前の事で確たる記録もなく、唯記憶をたどり申し上げて私の責任を果し度いと思ひます。其頃は明治廿三年に國會が開かる時とて何でも彼んでも多数決で取り極めるので、文學會の組織も會長、書記、會計等の選舉も多数決の結果で取り極めた様な次第でありました。

しかし、当時は宮城女学校創立間もない時期でもあり、異説がないわけではない。というのも、1909(明治42)年3月に刊行された『萩の下露』第1号の「初刊の辞」においては、「宮城女学校文學會は明治二十二年の秋に始まり」と記しているのである⁶。これによれば、文学会は1889年創設ということになる。これはどのように考えたものだろうか。

これらのなかで最も古い、つまり創設当時に最も近いのは、唯一1889年とする『萩の下露』第1号である。しかも、「初刊の辞」の執筆者の深田康守は国語教師であるから、その点においても記述の信憑性は決して低くはない。しかし、単純な誤記あるいは誤認である可能性がないわけではない。

他方、1890年とする記述のなかで最も古いものは『一覽』であるが、これも時期的には『萩の下露』第1号より多少遅れる程度であるし、何より宮城女学校として学外に向けて刊行されているものであるから、いわば最も権威のあるものである。また、『50年史』についても、本人があくまで記憶に頼っていると述べていることには留意しなくてはならない

² 『70年史』, 11頁。

³ 『80年史』, 107頁。

⁴ 『天にみ栄え』, 224頁, 449頁, 857頁。

⁵ 『50年史』, 164頁。

⁶ 『萩の下露』1, 1頁。

が、国会開設という歴史的出来事とともに想起したのであるから、信憑性は高そうである。

以上より、通説を確認したに過ぎないことにはなるが、文学会の創設は1890年とするのが妥当であると思われる。では、文学会はどのような活動をしていたのかというと、創設当時の状況を記したものとしては、『50年史』の記述が最も具体的であるので、以下に引用する⁷。

毎月雑誌を発行して其名を宮城野と名づけ、各自が書き一冊の本として應接室に置いたものです。文章、新体詩、小説、学校の報告等でありました。而して年一回大々的の大会が舉行せられて、知事閣下師團長閣下、諸學校長始め知名の士をお招きして茶菓を供して互に發展したものでありました。其頃すでに第二高等學校で文學會の催しがありまして、我が校よりも大會毎に校長はじめ役員が招かれて居りました。何でも高校でやる事は我々の學校でもやるのですからセツキスピヤーの劇があれば、此次には我校でもやると云ふた風で、高校の向ふ張りをした様な次第で男のやる事は女でも出來ると思ふて勵んで勉強したものでしたが、何しろ全校で三四十名の生徒でしたから何を相談しても直ぐ極ると云ふた様な譯でした。

即ち、雑誌『宮城野』の発行が筆頭に挙げられているほか、年に一度の大会ではシェークスピアの劇などが上演されていたことがわかる。

b. 『宮城野』から『萩の下露』へ

雑誌『橄欖』をテーマとする本稿では、これらの活動のなかでも『宮城野』に焦点を当てるが、まず注目すべきはその発行ペースである。1890（明治23）年と言えば、宮城女学校の創立からわずか4年後であり、それだけでも当時の文芸活動に対する熱心さをうかがうことができるが、毎月1冊とは、相当なペースで発行されていたことがわかる。

『宮城野』はその後、1909年に至るまで、およそ20年間で107冊発行された⁸。平均すると1年あたり5冊強であるから、発行ペースは落ちたのかもしれないが、それでも十分速いペースであると言って良いだろう。ただし、現存するものは見つかっておらず、内容については残念ながら知ることはできない。

しかし、その『宮城野』の歴史はそこで幕を下ろし、『萩の下露』に引き継がれることとなる。その経緯もまた、『萩の下露』第1号の「初刊の辞」において詳しく述べられている⁹。

されど、ただちり失せざらんが爲にとて、僅かに、一部をかきしるせるにとゞまり、普く人の見るべきにもあらで、遂に、文箱の底のものとしもなりはてぬるがくちをし

⁷ 『50年史』、164頁。

⁸ 『萩の下露』1、1頁に「宮城女學校文學會は明治二十二年の秋に始まり、つぎ／＼にもものして、それが雑誌を宮城野となづけ、號をかさねて、すべて、百〇七號とはなりぬ。」とある。

⁹ 同上、1～2頁。

ければ、いかで、かひあるさまに、なしかへばやとて、こたびよりは、活版を用ゐてその数を多くし、更に號を改め、名をも、宮城野に因みて萩の下露とぞおほせつる。みかさとまをせとよまれし名所は、名のみになりて、今は、そのなごりだに無げなるこそあたらしけれ。こは、雨にまされる大御代の恵みに、なりたゝむ子等の、作りいでむ文は、ありし秋萩の下露のしげきの如く、よみいでむ歌は、その露のきよきが如くなれかしとてなむ、あはれ、この雑誌のいや榮えに榮えて、秋萩をめづるが如く人のほめたゝふるに至らば、この會のほいなりとやいはまし。

つまり、手書き原稿1部のみしか作成しなかった『宮城野』を『萩の下露』と改名し、活版印刷が用いられることになったのである。この名前の由来はというと、神の恵みで育った生徒たちの作品が、萩の葉の下につく露のように清く、榮えるように、ということのようだとわかる。『萩の下露』は『宮城野』を発展的に継承したものと考えて良いだろう。

『萩の下露』時代の文学会の活動については、『一覽』に詳しい¹⁰。

本校文學會ハ明治廿三年九月ノ創設ニ係リ本校當局ノ監督指導ノ下ニ生徒之ヲ經營シ本校教職員生徒ハ當然之ニ屬スベキモノトス

本會ハ毎月一回例會毎歳一回大會ヲ開ク本年度ヲ以テ第廿回大會ヲ開クニ至レリ又本會ノ記事ヲ収録シテ雑誌『萩の下露』ヲ發行ス

これは文学会の概要を示した前文であるが、第6条には、雑誌の発行に関する規定がある¹¹。

毎月一回會員ノ寄稿及ビ本會ノ記事其他有益ノ事項ヲ輯メテ雑誌ヲ編成ス

ここにおいても、「毎月1回」という発行ペースが掲げられているが、しかし、現実にはそうではなかった。第1号が1909年3月発行であることはすでに見たが、続く第2号は、これより1年以上も後の1910（明治43）年5月であった。また、第3号は確認できていないが、第4号に至っては、1914（大正3）年3月と、第2号発行から4年も経っていた。その後、第5号は1915（大正4）年6月、第6号は1916（大正5）5月、第7号は1917（大正6）年5月と、ほぼ1年1号のペースに落ち着くが、当初規定されていた毎月1号とはほど遠いペースとなってしまったのである。

このことは、規程のうえからでも確認できる。『萩の下露』第4号には、『一覽』と同様の規程が収載されているが、ちょうど第6条の部分のみが削除されている。そして、『萩の下露』第5号が発行された1915年からは「宮城女學校文學會規定」が新たに制定されており、その第11条では、「雑誌部ニアリテハ毎歳一回機關誌「萩の下露」ヲ發刊ス」となっている。つまり、実情に合わせて規程を改定していった過程が如実に示されているのである。

¹⁰ 『一覽』、31頁。

¹¹ 同上、32頁。

活版印刷を導入して、文学会による文芸活動のさらなる発展を企図した『萩の下露』は、必ずしも想定した成果をあげられなかったのではないだろうか。

c. 『萩の下露』から『校報』へ

そんななか、1918（大正7）年10月、突如『校報』という雑誌が発刊された。『校報』第1号の「創刊の辞」によれば、その趣旨は以下の如くである。

「校報」の發刊に就ては、多くの辯を要しないと思ふ。本報は新しき企劃から生れ出たのではなく、實は宮城女學校文學會及同窓會より刊行し來つた刊行物を合併したものに聊か更張を加へたに過ぎないのであります。本報の刊行は年二回とし、第一回は六月、第二回は十二月に發行することに定めて置きます。（中略）

叙上の如く、「校報」發刊の目的は、世の未だ本校を知らざる數多き友に宮城女學校を紹介せん希望を達すべく、本校職員、同窓會員、生徒及び校友の間に「家庭の火の消えぬ」やう斷えず燃料を供給せんことを期するのであります。

さて、このような『校報』の意義について、どのように理解したものだろうか。『校報』は「宮城女學校文學會及同窓會より刊行し來つた刊行物を合併したものに聊か更張を加へた」とは言うものの、当時の同窓会においてどのような刊行物があつたのかは定かではなく、少なくとも定期刊行物と呼べるようなものはなかつたと考えられる。また、『萩の下露』には教職員による講演や論考、「同窓會消息」というコーナーなども設けられており、雑誌の構成は『校報』とほぼ変わらない。したがって、何を合併し、何を加えたのか、判然としないのである。

それでは、『萩の下露』から『校報』になることで何が変わったかと言えば、大きな点としては、発行者と発行ペースの2つである。前者については、文学会から宮城女学校になった。後者については、ここに定める通り年2回が守られていたので¹²、『萩の下露』より頻度が上がっているのは間違いない。

とすると、考えられるのは、文学会による雑誌の発行が当初想定していたよりも不活発だったことを受けて、まさに「家庭の火の消えぬ」やう斷えず燃料を供給」するべく、教職員が主導となって出版活動に乗り出した、ということである。1918年と言えば、宮城女学校に第二校舎が完成した年であつた。また、この数年前から家政や音楽といった専攻科が設置されるなど、いわば躍進を遂げようとしていた時期であつた。あるいは『校報』は「広報」に通じるので、もしかしたらこの時期に、学校としての広報活動の必要性を痛感し始めていたのかもしれない。いずれにせよ、文学会の出版活動を不十分と見た学校側

¹² 筆者が確認できた『校報』は第1号から第4号までであり、その範囲においてのみ年2回であつたと断定できる。ただ、後述するように、1926年に刊行された『橄欖』が、『校報』第17号との合併号であつたことは確実であるので、1918年から1925年までの8年間で16冊が発行されていたこととなり、年2回のペースはほぼ間違いないであろう。

の焦りや苛立ちのようなものが窺える、とまで言うのは言い過ぎであろうか。

ただし、付言しておく、雑誌の発行は活発ではなかったものの、文学会の活動全体については、盛んになっていると見て良いのではないだろうか。というのも、1915年に制定された新規程によれば、文学会は文学部、会計部、雑誌部、運動部の4部に分かれて運営されるようになっており、より系統立った組織運営が図られているように見受けられるからである。

d. 「自主活動」考（その1）

発行者に話が及んだところで、ここで一旦、歴史の流れを断ち切り、文学会という組織の性質について今一度考察してみたい。その創設に関して言えば、たとえば、『70年史』には「本校では文学会が生徒自体の手によつて創設運営され」とある¹³。また、『天にみ栄え』には「生徒達によって文学会が創設され」とあり¹⁴、『萩の下露』が創刊されたことに関しても「これは生徒の文芸活動の隆盛活潑を示すもの」と言う¹⁵。このように、文学会が話題になるとき、基本的には「生徒の自主活動」というニュアンスで語られるのだが、実態はどうだったのだろうか。

まず、文学会の会員であるが、『宮城野』時代については史料がないため、詳細はわからない。先に引用した田村たみこの「文學會の創立に就いて」には、「文學會の組織も會長、書記、會計等の選舉も多數決の結果で取り極めた」とあり、これだけ読めば、民主的な自主活動組織のように思えるが、肝心の会員資格や選挙資格、被選挙資格者が定かではないのである。それらが明らかになるのやはり『萩の下露』時代であり、『一覽』には以下のようにある。

第三條 本會ハ宮城女學校生徒ヨリ成ル

第四條 本校職員ニシテ本會ヲ贊助シ毎月金七錢以上ノ金品ヲ寄附セラル、トキハ贊助員ト稱ス

そして、会務を処理するために、会長1名、副会長2名、委員6名を置くとしているが、第8条には以下のように定めている。

第八條 會長ハ委員會ノ決議ニヨリ贊助員中ヨリ推薦ス¹⁶

つまり、文学会の会員は生徒であったものの、会長は賛助員即ち教職員から選ばれていたのである。このことは実際の運用としても確認でき、会長および副会長は以下のとおりである。

¹³ 『70年史』、11頁。

¹⁴ 『天にみ栄え』、224頁。

¹⁵ 同上、412～413頁。

¹⁶ 以上、『一覽』、31～32頁。

年度	会長	副会長	副会長
1908	ミラー校長	村上先生	原田先生
1909	ワイドナー校長	村上先生	
1910	ワイドナー校長	村上先生	中村先生
1911	ワイドナー校長	村上先生	中村先生
1912	ワイドナー校長	村上先生	小野先生
1913	ワイドナー校長	村上先生	小野先生
1914	ファウスト校長	村上先生	小野先生

ここから、会長は教職員のなかでも校長が選ばれるというのが慣例だったようであり、副会長もまた慣例的に教職員がこれに就いていたことがわかる。さらに、1915年以降の新規程においては、4部制になったことにより役員制度が改定されたが、そこでは以下のように規定されている¹⁷。

第六條 本會役員ハ會長一名、部長數名、委員數名ヲ置キ任期ハ一ケ年トス但シ會長ハ校長、部長ハ職員、委員ハ生徒トス

4部制になったあとにおいては、かつての副会長を各部長と改編する形で、これまでの慣例を制度化することになったのである。

以上、文学会は史料で確かめられる限りにおいては、生徒たちを会員とする組織でありながら、その役員については、トップはあくまで教職員であった。こうした性質を理解しておく必要があるだろう。そして、そのうえで、文学会が刊行していた『萩の下露』がなくなり、宮城女学校の刊行する『校報』へと変わっていったのである。

e. 『橄欖』の誕生

以上のような経緯を知れば、『校報』創刊から3年後の1921（大正10）年に文学会が『橄欖』を創刊したことが、なぜ冒頭に示したような喜びをもたらしたか、理解することができよう。『橄欖』はいわば、文学会再興ののろしだったのである。

それでは、『橄欖』は生徒たちの手によって作られたのか、というと、そういうわけでもなさそうである。当時の教員の1人である黒澤良平は、次のように回想している¹⁸。

「萩の下露」は一時中絶して居たが、大正十年から名も元祿式から聖書的な「橄欖」となりて再興された。是れは小野玉枝先生の御盡力で命名も同先生がノアの方舟の小枝からの思ひ付きかと察せられる。

もちろん、このことは生徒たちもしっかりと認識しており、自らの力不足とともに、教

¹⁷ 『萩の下露』5, 79頁。

¹⁸ 『50年史』, 165頁。

員（小野先生）に対する感謝の気持ちを率直に表している¹⁹。

私共なんの働きもしなかつたものでさへも、こんなに嬉しくつてたまらない程の感激をあたへられてゐるんですもの。御忙しい中をさいて全力をあげて編輯の事から、装訂の世話までなさつて下さつた部長の小野先生は、どんなに喜んでいらつしやるかを思はず居られません。殊に先生は生れ出た可愛い子の名づけの親でいらつしやるんです。

しかし、それでも生徒たちがこの『橄欖』創刊をめぐつて、これまで以上に主体的に関わっていたことは、この喜び以外に、組織の面からも推測できる。というのは、『橄欖』第1号に記された「文學會報告」によれば、これまでになかったことが起こっているからである²⁰。

四月二十二日（金）放課後、寄宿舎の自修室にて大正十年度文學會委員の選舉會を開く。

例年の選舉法を改め、單數候補をあげ、會員の賛否を尋ね、會員全部の賛成を受け、左の通り定む。

と、このように記したあと、会長としてファウスト校長を選んだのち、委員長として英文科2年生の中村きくよという生徒を選出しているのである。4部長よりも先に挙げられていることから、その地位の高さが窺えるだろう。

この委員長という役員がどのような性質のものであったのか、規程は見つからない。『橄欖』自体は雑誌部の活動によるものだったため、委員長とどこまで直接の関係があるのか、確実なことは言えない。とはいえ、わざわざ選挙法を改めたことと新たな雑誌の創刊が、単なる偶然の一致とも思われぬ。『橄欖』の誕生は、生徒による自主活動の高まり、あるいはそれを望んだ教職員による支援、という大きな文脈のなかに位置づけて理解すべきだと考えられるのである。

ところで、『橄欖』の誕生によって『校報』はどうなったかと言えば、註8にも述べたように、年2回のペースを維持して、刊行され続けたようである。即ち、ここに宮城女学校の『校報』と文学会の『橄欖』という体制が構築されたことになる。このことは、『校報』と差別化できたという点において、『橄欖』が生徒たちのものであるという意識をさらに強めたかもしれない。

2. 『橄欖』初期の苦難と混乱

さて、このような紆余曲折を経て誕生した『橄欖』のその後の歩みは、どのようなものだったのだろうか。生徒の自主活動は、期待通りの成果をあげ、実を結んだのだろうか。

¹⁹ 『橄欖』1, 66～67頁。

²⁰ 『橄欖』1, 63頁。

教職員はそこにどのように関わったのだろうか。これについてもやはり、雑誌の発行状況やその母体となる組織という点から考察していこう。

a. 文学会から校友会へ

これまで見てきたように、『橄欖』を発行したのは1890年以後の歴史を持つ文学会であったが、この文学会は、『橄欖』創刊翌年の1922（大正11）年に校友会と改称される。その経緯について、『橄欖』第2号には以下のように記されている²¹。

年毎に多数の姉妹達を迎へて我が文學會は次第に規模が大きくなりましたので、ここに校友会と改名して益々本會の發展を計ることになりました。

ところで、この文学会から校友会への改称についても、正確な時期については検討を要する。というのも、『70年史』、『80年史』、『天にみ栄え』のいずれも1921（大正10）年としているからである²²。しかし、『70年史』には「校友会雑誌「橄欖」が「萩の下露」に代つて創刊されたのは、大正十年（一九二一）六月三十日のことであつた。」とあり、『80年史』には「更にこの大正十年宮城女学校文学会は改称されて「橄欖」を年一回刊行することに改めた。」とあるように、『橄欖』創刊に合わせて改称されたかのように書かれているが²³、『橄欖』第1号にはそのようなことを示す記述は見当たらないため、おそらく誤りである。つまり、『70年史』以下は、文学会から校友会への改称の経緯について誤った理解をしており、そのうえで1921年としているのである。

もっとも、上に見た『橄欖』第2号の記事には校友会が成立した日付までは記されておらず、第1号発行後の1921年7月から第2号発行前の1922年4月までの間であることしか特定できない。よって、結果的に通説の1921年が正しい可能性が全くないわけではない。とはいえ、実質的な活動を年度単位で考えるなら、校友会の活動は1922年度から始まったと言えることはできるだろう。したがって、本稿では通説を訂正して、1922年に改称されたものとしておきたい。

それでは、文学会から校友会へとなることで、どのような点が変わったのだろうか。『橄欖』との関わりの深いところに限定して見ていくと、1つには、かつての「文学部、会計部、雑誌部、運動部」という4部制が、「文芸部、運動部」の2部制に改編されていることが挙げられる。即ち、雑誌部がなくなり、第6条において「文藝部ハ毎歳一回雑誌「橄欖」ヲ發行ス」²⁴と規定されたのである。ただ、文芸部長は2名（いずれも教職員）置いていたようであり、かつての文学部と雑誌部を単純に合併させたものと考えて良いだろう。つまり、文学会から校友会へと組織名は変わったものの、『橄欖』発行という点から見れば、

²¹ 『橄欖』2, 49頁。

²² 『70年史』, 26頁。『80年史』, 36～38頁。『天にみ栄え』, 863頁。

²³ 『天にみ栄え』には、改称されたという“事実”が記載されているのみである。

²⁴ 『橄欖』2, 50頁に掲載する「宮城女学校校友会規則」による。

特に影響はなかったと考えられる。

そして、興味深いことに、その影響のなさを自ら示すかのように、校友会とすでに改称されているはずの『橄欖』第2号においても、発行者は相変わらず「宮城女學校文學會」となっているのである²⁵。さらに、編集後記も「雑誌部委員」として書かれていることも注目に値する²⁶。

実は、「雑誌部委員」という呼称の方は第3号以降は用いられなくなったが、発行者「宮城女學校文學會」の方は、第7号まで継続することとなる。組織が改称されたという事実を当事者たちが知らないとは考えられないので、この混乱ぶりを理解するのはいささか難しい。『橄欖』編集委員にとっては、新たになった校友会よりもかつての文学会の方にアイデンティティーを感じていたということだろうか。これについては、後述する。

b. 委員会の苦しみ

次に、『橄欖』における文芸活動の様相を詳しく見ていきたい。結論から言うと、生徒中心の『橄欖』の船出は、決して順風満帆というわけではなかったようである。というのは、上に見たように発行に際しては小野先生の力添えを得なくてはならなかったし、原稿の集まりとて決して十分なものではなかったからである。その辺りの事情については、第1号の編集後記に率直に語られている²⁷。

雑誌の発行のおくれた罪も、又原稿の集らない私共の不平も、又この雑誌の内容がたとへ貧しく、つまらないものであらうとも、物足らない點も、生れ出たと云ふこの尊い事實のまへには、すべては忘れられてたゞ涙ぐんで居ります、みんな一人々々の手をにぎって喜び合ひたい様な氣もちです。

しかし、自らの力の及ばなさを痛感しつつも喜びと希望に充ちたこれらの編集後記からは、生徒たちの意気込みがひしひしと伝わってくるだろう。その苦しみと意気込みのせめぎ合いは、第2号以降も基本的には変わるものではなかった²⁸。

主に卒業生を中心としてより充實した橄欖の第二號を出さうとして私共は大希望を以て準備にとりかゝつた。けれどあまり原稿がおもはしく集らないので途中でいや氣がさした、あまりみんなが大家ぶつて書かないので何も出来ないやうな氣がして。

(中略) けれどこんなものでも出来ればうれしい氣がする

第3号は、多少とも軌道に乗ってきた兆しを感じさせるものではあるが、十分な成果を得たと言うにはほど遠い状況であらう²⁹。

²⁵ 同上、奥付。

²⁶ 同上、56頁。

²⁷ 『橄欖』1、66～67頁。

²⁸ 『橄欖』2、56頁。

²⁹ 『橄欖』3、60頁。

いつまでも産まれたばかりの赤ん坊では居れません、内からは生命が高鳴って響きます。すくすくと力が動いて来るではありませんか。やつと片言まじりに小さいお話しをするやうになりました、ずい分滑稽な會話でせう、その無邪氣なあどけない顔にあなたも思はずやさしくほゝ笑まるゝかもわかりません。しかしそれによつて少しでもあなたの心を和げることが出来ますなら私達は満足いたします。

何といつても、やつと生長して来た子供です。未來をもつてるものだといふことを覚えて下さい、そしてまつすぐに、いゝものに大きくなる様にいつも祈つて下さい。そんななか、小野先生ともう1人の協力者と思しき岩間よし先生が編集から離れ³⁰、第4号は生徒のみで制作されたため、その苦労はさらに大きくなった。編集委員によつて感じ方は当然異なるが、それぞれの感想に耳を傾けてみよう³¹。

本號はどうしても夏休み前に出すべき豫定のものであつたが原稿の集まらないのや委員の缺席などの關係から／＼ずる延びて今頃原稿の校正等とは早くから寄稿して下すつた方々に對して誠に濟ないと思つてゐます。しかし止むを得ぬことであつたからたゞお詫をするより仕方ありません。

随分澤山の方々が投稿して下すつたが紙數の都合や校友會雜誌としては掲載出来ないやうなものの中にはありましたから全部をとることは出来ませんでした。例年のやうに何か英語のものを西洋の先生にお願いしたいと思つたのですがそれも餘り急なので間に合ひませんでした。

今度といふ今度は全く牧者もなく荒野にのつ放しにされた羊の群のやうに委員にのみまかせられたのでかなり苦しいものでした。どうかして美しい立派なものが生れ出づるやうにと願ふのは母のみの願ではありません。私達は毎日首を延ばして待つてゐました。が結極生れ出たものは貧弱な赤坊でした。私達は痛ましい心で眺めました。けれどもどこかしら捨てられないやうな愛着を覺えました。やつぱり私達やあなた方の尊いひとり子なのですもの。兎も龜も嬉しいことです。

あるいは生徒の間に『橄欖』に対する認知は広がり、投稿自体はそれなりにたくさんあったことを窺わせるが、いかんせん質的な面で十分ではなかつたことがわかる。次の第5号にしても、同様である³²。

第五號の橄欖をものしたことに就て委員が経験した悩み、又申さなければならぬお詫は毎年繰り返されることと同じです。原稿が集らないこと。私ども委員の力のたりないことなど――。多くの方が橄欖は委員の手品でも作り出すものだと思つてゐらつしやるのではないでせうか。橄欖は「みなさま」の中に生れ出さずべきものなのです。

³⁰ 同上、61頁。

³¹ 『橄欖』4、40頁。

³² 『橄欖』5、奥付。

なお、このように毎年原稿集めに苦勞していた様子は、その作品の質はともかく、ページ数として如実に表れている。第1号から第5号までの総ページ数は以下の通りである。

第1号	第2号	第3号	第4号	第5号
68ページ	56ページ	61ページ	41ページ	38ページ

多少の起伏はあるものの、漸減傾向にあったことは明らかであろう。

だが、こうした活動も、1926（昭和元）年の第6号において転機が訪れる。委員たちの努力も空しく徐々にページ数を減らしていた『橄欖』であったが、創立40周年に当たっていたこの年は、なんと140ページに達したのである。理由は、40周年というだけではなかった。その状況を具体的に見てみよう³³。

本號は本校創立第四十年記念號として特別に編輯し在米在校生徒間に配布した橄欖と學校より卒業生に頒つ校報とを合併致しましたから橄欖の第六號であり校報の第一七號に相當します。此の合併は來年度より繼續せらるゝ者か今回限りの舉であるかは未定であります。今回の記念號に依り同窓諸姉と在校生と本校との一致の精神が一層密接となる事が出来れば編輯者の満足是に越したことはない、同窓會の方々から又其幹部の方々から澤山に原稿を下されたことを感謝致します。

即ち、かつて『萩の下露』が一旦『校報』に改編されたのが、そこから独立する形で文学会の復興を表した『橄欖』であったが、今度は『橄欖』の方が『校報』を合併して発行したのであった。毎年原稿集めに苦勞し、一喜一憂していた生徒たちの満足感と安堵が、察せられるだろう。

ところで、合併により原稿は集まったものの、翌号以降はどのようにするのかという問題をはらんでいたが、この点はどうなったのだろうか。結果として、『橄欖』はこのまま『校報』を合併した形となり、発行を続けた。そうすることで、原稿の問題は解決し、第7号こそ80ページほどであったが、第8号以降しばらくは毎号100ページを超えるものを発行することができたのである。

c. 「自主活動」考（その2）

こうした『橄欖』の動向の裏には、生徒の自主活動をどう捉えるか、という視点もついて回っている。『橄欖』の誕生が、生徒によるこれまでにないほどの自主活動意識の高まりを表しているということはすでに述べたが、その後はどうだったのか、ということである。

実は、『橄欖』誕生時に置かれた役員「委員長」は、文学会が校友会に改編されるに及んで消滅した。代わって副会長1名が置かれ、教職員が選出されることと規定された³⁴。

³³ 『橄欖』6, 129頁。

しかも、その選出方法に至っては、以下のように規定されている³⁵。

第九條 會長ハ本校々長ヲ推戴シ、副會長及部長ハ賛助會員中ヨリ互選シ、委員ハ生徒ノ互選トス。

「單數候補をあげ、會員の賛否を尋ね」ていた選挙法は踏襲されず、「副會長及部長ハ賛助會員中ヨリ互選」することとなった。つまり、『橄欖』誕生時に見られた生徒の地位の高まりは、わずか1年で後退したのである。

しかし、このような校友会の流れと、『橄欖』の自主性とは、必ずしも軌を一にしない。第4号と第5号では確かに、生徒のみで——その結果大いに苦しんだのであるが——『橄欖』を発行しているのである。この点に、教職員が生徒を指導する形で運営していた校友会と、生徒自らが編集し文学会を名乗り続けた『橄欖』編集委員会との間に、棲み分けともせめぎ合いとも解釈できる微妙な関係が見て取れるのではないだろうか。

『橄欖』の編集において、校友会との微妙な関係、即ち生徒たちの自主独立への憧れや矜持を見出せる点は、他にもある。というのは、まさに教職員の手を離れた第4号と第5号においては、内容のすべてが文芸作品で構成され、他号では必ず掲載されていた校友会をはじめとする活動報告の類が、全くなくなっているのである。これは単なる偶然でも、編集上の不備でもない。なぜなら、『橄欖』編集に携わった生徒たちが何を目指していたか、第7号の編集後記に克明に述べられているからである。

今年は一昨年のように文藝雑誌を作る予定であつたが出来上つてみるとやはり校友会雑誌の形式をぬけ出なかつた。淋しいと思ふけれどもこれも經費の都合上致方がない。

つまり、『橄欖』は第6号以降、『校報』と合併した代わりに、旧来の形式に改めざるを得なかつた。それは文学会を捨てて校友会に収まることを意味した。現実的な対応と知りつつも、夢をあきらめる気持ちだつたのではないかと察せられるのである。事実、第8号からは、発行者はついに宮城女学校校友会となった。そして、これ以降、生徒たちが編集後記を書くこともなくなったようである。

以上、自主活動意識の高まりとともに誕生した『橄欖』は、苦しみのなかに夢を追った波乱の時期を経て、その挫折の末に、校友会雑誌として地位と安定を得ていくことになったのである。

おわりに——エピローグ——

第8号以降の『橄欖』は、発行ペースやページ数を見る限り、安定したものとなった。1929（昭和4）年に発行された第9号からは、同窓会のための記事も増えた。それは、そ

³⁴ 『橄欖』2、50頁に掲載する「宮城女学校校友会規則」による。

³⁵ 同上。

の前年に同窓会にて、会費の値上げ案が可決され、会費前納の会員に『橄欖』を送ることとしたことと関係するだろう³⁶。そして、1933（昭和8）年には、規程を改定して毎年2回の発行に増やしている。こうして『橄欖』は、宮城女学校の生徒を正会員、教職員を賛助員とする校友会の発行する機関誌として、本学の発展に歩調を合わせるように発展していったのであった。

一方、『橄欖』の初期——それは同時に文学会の末期であったが——は、苦難と混乱に満ちた数年間であった。しかしここには、大正デモクラシーの時代思潮に乗ったかのように、生徒たち自らが主体となって文芸活動、創作活動を行いたいという、強い心意気が感じられた。繁栄に至ることなく、挫折とともに幕を閉じた『橄欖』初期の試みについても、私たちは記憶にとどめておく必要があるだろう。

以上、本稿では、雑誌の発行とその組織という、いわば形式的なところから『橄欖』の性質について考察してきたが、そのため作品の内実にまで踏み込むことはできなかった。生徒たちにとっての『橄欖』の意義を理解するためには、作品分析を通じて生徒たちの精神世界をより深く考察する必要もあるだろう。今後の課題としたい。

³⁶ 『70年史』、143頁。